

# 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書

駒形 45-4 地点

令和 2 年 3 月

一関市教育委員会

# 骨寺村莊園遺跡確認調査報告書

駒形 45-4 地点

令和 2 年 3 月

一関市教育委員会

## 序

一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』<sup>むつのくにほねでらむらえず</sup>の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。平安時代以来、中尊寺<sup>きょうぞうべつとうりょう</sup>経蔵別当領であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』<sup>あずまかがみ</sup>によって証明されています。平成17年には国史跡「骨寺村莊園遺跡」<sup>ほねでらむらしょうえん いせき</sup>に指定、18年には国重要文化的景観「一関本寺の農村景観」に選定されています。

さて、骨寺村莊園遺跡と深い関係にある「平泉」は、23年6月に世界文化遺産に登録されました。世界遺産への拡張登録を目指している「骨寺村莊園遺跡」については、24年度に世界遺産暫定一覧表に登載されており、教育委員会では継続して調査研究を行っています。

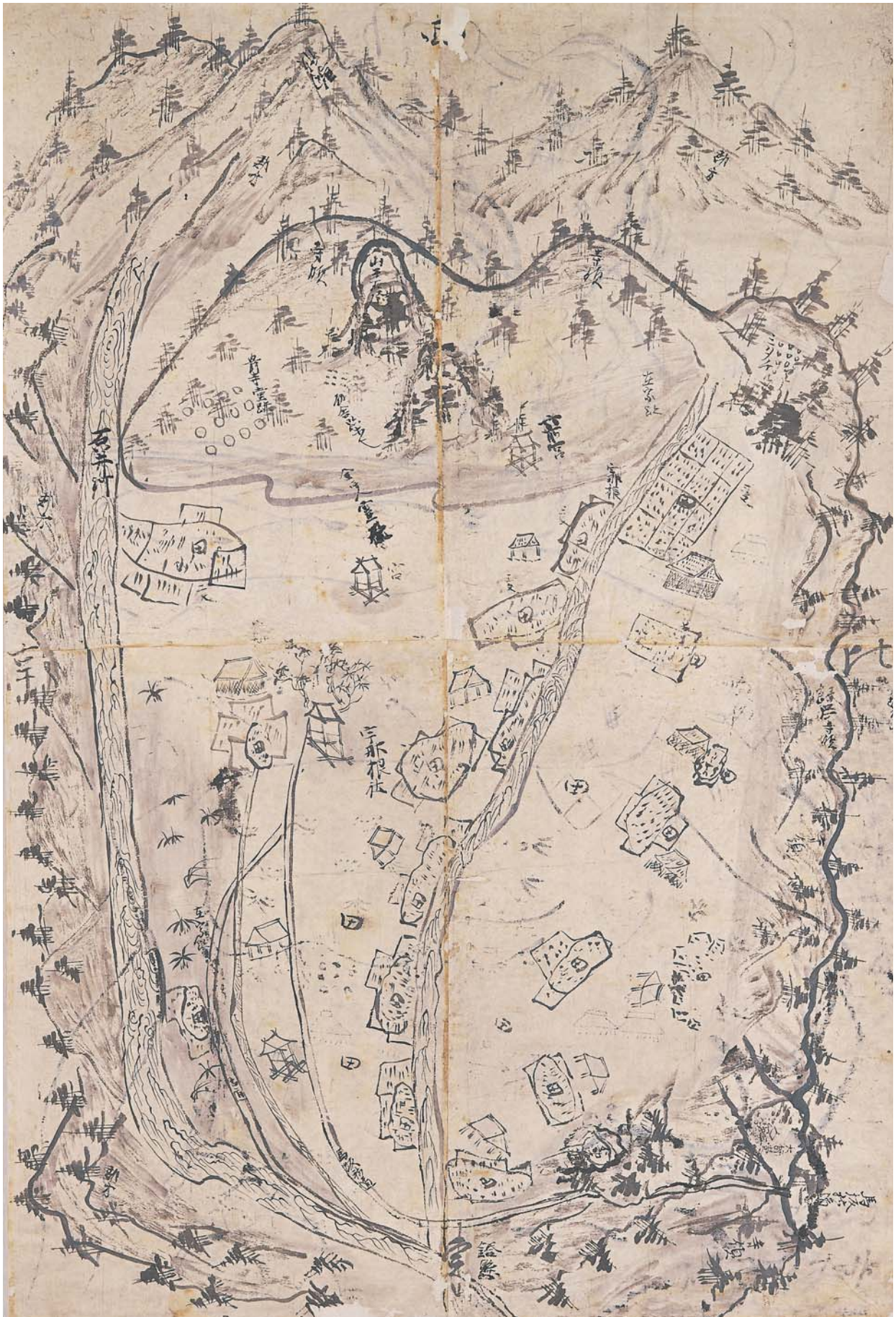
本年度は、埋蔵文化財包蔵地「骨寺村莊園遺跡」の確認調査を実施しました。本書により調査成果を広く公開し、市民ならびに全国の方々にも当市の文化財を知っていただき、関心が高まることを期待しています。また、地域のルーツを紐解いていくことが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。

最後に、調査に際しては地権者、地域住民の皆さまをはじめ多くの方々のご協力を頂きました。衷心より感謝を申し上げます。

令和2年3月

一関市教育委員会

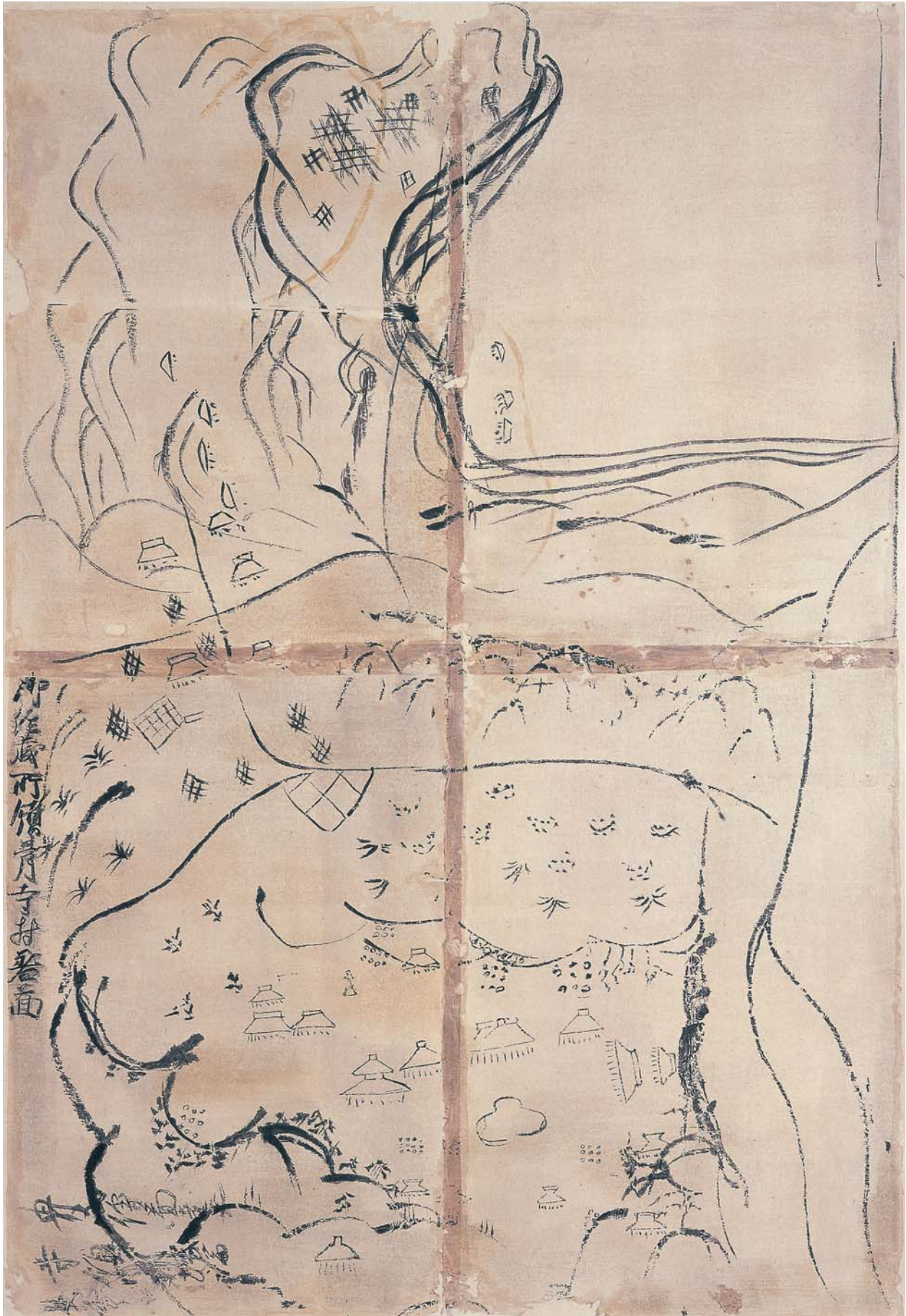
教育長 小 菅 正 晴



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』詳細図（複製） 原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』簡略図（複製） 原典は中尊寺蔵



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』紙背図（複製） 原典は中尊寺蔵



駒形 45-4 地点調査区遠景（北東から、無人航空機による空中撮影）



駒形 45-4 地点調査区全景（直上から、無人航空機による空中撮影）

# 例 言

- 1 本書は、岩手県一関市教育委員会が令和元年度に行った骨寺村荘園遺跡に係る調査報告書である。
- 2 調査は、国庫補助事業及び県補助事業を活用した。
- 3 調査は、平成7年に国の重要文化財に指定された『陸奥国骨寺村絵図』（中尊寺蔵）の現地として、一関市巖美町本寺地区に所在する国指定史跡骨寺村荘園遺跡の範囲及び内容の確認のための発掘調査を実施したものである。
- 4 令和元年度調査対象地は、骨寺村荘園遺跡の構成要素である「白山社及び駒形根神社」の南西に接する駒形45-4地点である。
- 5 調査主体は、一関市教育委員会 教育長 小菅正晴であり、現地調査は文化財課が担当した。
- 6 調査体制は以下のとおり。

教育委員会	文化財課	課長	千葉	浩
		文化財係長	坂本	光司
		主任学芸員	菅原	孝明
		文化財調査研究員	光井	文行
			山川	純一
- 7 本書の作成は文化財課が行い、担当箇所の文末に執筆者名を付した。編集は山川が行った。
- 8 本書の図6に使用した地形図は、一関市長の承認を得て、測量成果を使用したものである。（許可番号 令和2年2月28日総第11023号）
- 9 土層断面図の土色表示は新版標準土色帖2002年版（日本色研事業株式会社）を用いている。
- 10 調査に係る無人航空機（UAV、通称ドローン）による遺構の空中撮影は川嶋印刷株式会社、自然科学分析に係る業務は株式会社加速器分析研究所に、調査補助及び調査区刈り払い業務は本寺地区地域づくり推進協議会に、それぞれ委託した。
- 11 報告書作成にあたっては、一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会及び同世界遺産推進部会、岩手県教育委員会平泉遺跡群調査整備指導委員会の指導と助言を得ている。また、出土した陶磁器の鑑定については、村田淳氏（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）の、石製品の石材鑑定については、佐々木繁喜氏（一関市文化財調査委員）の指導を頂いた。
- 12 調査協力者・機関（敬称略・50音順）

及川幸子、小岩寿男、小巖芳夫、佐々木カノコ、佐々木源輔、佐々木繁喜、佐々木登志也、佐藤勲、佐藤金朗、佐藤健爾、佐藤信男、佐藤登、佐藤弘征、佐藤光男、佐藤光雄、二階堂孝子、羽柴直人、平山勇、菅田慶信、村田淳、八木勝枝、吉田エルマノニアル

岩手県教育委員会、奥州市教育委員会、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会、文化庁、骨寺村ガイドス運営協議会、本寺地区地域づくり推進協議会



## 目 次

序	1
カラー図版	3
例言	7
目次	8
1 位置と環境	9
2 調査に至る経緯	14
3 駒形45-4地点の調査	21
4 白山社及び駒形根神社の踏査	26
5 骨寺村荘園遺跡（駒形45-4地点）における放射性炭素年代（AMS測定）	30
6 総括	35
出土遺物観察表	36
写真図版	37

# 1 位置と環境

## 1 一関市の位置と環境

一関市は、岩手県の南端に位置する。平成17年（2005）9月20日に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の7市町村が合併、さらに23年（2011）9月26日に藤沢町と合併した。東西に約63km、南北に約46kmの広がりを見せる市の総面積は1,256.42km<sup>2</sup>である。

中央部を北上川が南流する市域は、西側に奥羽山脈、東側に北上山地がある緑豊かな農山村である。著名な記念物は、コニーデ型二重火山である栗駒山（須川岳）を中心とする火山性山岳風景地の国指定「栗駒国定公園」（昭和43年（1968））や北上川水系磐井川流域の国指定史跡「骨寺村荘園遺跡」（平成17年）および国選定重要文化的景観「一関本寺の農村景観」（平成18年（2006））、下流部には磐井川によって滝或いは急流、深淵となって変化に富んだ溪谷景観をなす国指定名勝及び天然記念物「巖美溪」（昭和2年（1927））がある。市の東側には同じ北上川水系の砂鉄川流域に、古生代の石灰岩層が浸食されてできた国指定名勝「猊鼻溪」（大正14年（1925））がある。

## 2 骨寺村荘園遺跡の位置と環境

骨寺村荘園遺跡は須川岳を見上げる中山間地にある。遺跡のある一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として、中世以来の農村景観を良好に継承した地域で、須川岳から流れ出る磐井川の左岸に形成された小盆地に集落が点在する。平地部分の平均海拔高は約160m、南側を磐井川に接し、三方は海拔230m～260mの丘陵に囲まれている。

骨寺村荘園遺跡を取り巻く自然環境については、骨寺村荘園遺跡村落調査研究の一環である自然班（総括：広田純一（岩手大学教授））による一連の研究がある。地形・地質を担当した土井宣夫によると、磐井川に沿う地形の特徴は、須川岳北斜面から北上川へ合流する間に、いくつもの狭窄地による数珠状の小盆地が形成されている点にある。磐井川の流域には硬質の巖美層が広がる。この層は褶曲により磐井川の下底と河岸に交互に出現するため、下底（縦方向）と河岸（横方向）への侵食速度に差異が生じて、数珠状の小盆地が形成されたとしている。また、巖美層が交互に出現する理由は、断層活動により巖美層に褶曲が生じているためであるという（土井2012）。このようにして形成された小盆地の一つに骨寺村荘園遺跡は所在する。

現在の植生について、気候と植物・植生を担当した島田直明は、北側丘陵部にはコナラやクリの広葉樹が広がり、斜面下部には植林によるスギ林、上部の尾根にはアカマツやゴヨウマツ林が分布するとしている。一部にはブナ林も確認できたという。植物相からは日本海型要素と太平洋・温暖帯要素の両方のタイプが見られ、岩手県内陸部の中山間地としての地勢を反映している（島田2012）。それと関連して、磐井川左岸の旧河道地を対象に花粉分析を行った平塚明らは、915年に降下した十和田a火山灰の上層からイネ花粉が急増することを指摘しており、この時期に水田に生息する水生植物（オモダカ・サジオモダカ属）の増加から、本格的な稲作が始まったことを想定している。同時期にクリの花粉、アサヤソバの花粉も増加している。また堆積速度から14世紀以降にはスギやマツ林の拡大が推定されている（平塚他2012）。ただし十和田a火山灰の降下以降に上記の傾向が認められるとしても、土層堆積が継続的かつ安定的であったかが検討課題となる。年代についてもやはり発掘成果との突合が不可欠である。

### 3 歴史的環境

**中尊寺文書** 骨寺村の中尊寺荘園としての始まりを示す文書は、『中尊寺文書』の一つ「中尊寺経蔵別当補任状案」である。そこには自在房蓮光じざいぼうれんこうという僧侶が、紺紙金銀字交書一切経こんしきんぎんじこうしまいっさいきょうを奉行し、8年をかけて完成させたこと、その功により蓮光は中尊寺経蔵別当に就任したこと、そして蓮光の「往古私領」であった「骨寺」を経蔵に寄進し、永代にわたって経蔵別当領としたことが記されている。日付は天治三年（1126）三月二十五日、発給者は藤原清衡である。

『中尊寺文書』には、骨寺村の伝領に関する議状・補任状・安堵状が多数あり、室町時代まで経蔵別当領として相伝されていることが確認できる。その他、村の内部構造に関する文書として、「骨寺村所出物日記」（文保2年（1318）3月）・「骨寺村在家日記」（室町時代か）があり、貢納者と品目が書き出されている。

**吾妻鏡** 文治五年（1189）の奥州合戦で奥州藤原氏は滅亡し、中尊寺は庇護者を失うこととなった。『吾妻鏡』文治五年九月十日条には、中尊寺経蔵別当心蓮あんどんは所領の安堵を求め、源頼朝の宿所に参上したことが記されている。

心蓮は頼朝に対し、「中尊寺は清衡が建立したこと」「鳥羽院の祈願所となったこと」「蓮光から寺領の寄付を受け、それを御祈禱料に充当していること」「経蔵は紺紙金銀字交書一切経を納めている霊場であること」を述べている。その上で、中尊寺の存続と、合戦により住民が逃げ出した寺領の安堵を求めている。

これに対し頼朝は、経蔵別当領の一つ骨寺村の四至（村境）を定め、その上で、諸役免除の文書を下した。定められた四至は、東は鑑懸かぎかけ、西は山王窟さんのうのいわや、南は磐井川、北は峯山堂みたけどう（から）馬坂まさかである。

**陸奥国骨寺村絵図** 中尊寺大長寿院には2枚の絵図が残されている。簡略絵図（仏神絵図）と呼ばれるもの（カラー図版1）、詳細絵図（在家絵図）と呼ばれるもの（カラー図版2）である。また、詳細絵図の裏にも絵図があり、紙背絵図（カラー図版3）と呼ばれている。簡略絵図と詳細絵図は西を天（上）に、山稜部に囲まれた村落景観が描かれている。絵図の描写範囲は、『吾妻鏡』文治五年九月十日条に記された村の四至とほぼ同じである。つまり、頼朝によって定められた村の範囲が描かれている。

紙背絵図は、詳細絵図の裏側に描かれたもので、絵図の他に「骨寺絵図案」「寺領口口境論」「具書」等の文字も確認されている。

これらの絵図の作成目的は、中尊寺による村支配のための資料とする説（伊藤1957・吉田2008）と裁判の証拠書類説（大石1984）が示されてきたが、紙裏絵図と文字が発見されたことにより（黒田1995）、所領争いの裁判書類であることが有力となった。そしてその作成時期は簡略絵図が鎌倉時代中期、詳細絵図が鎌倉時代後期にそれぞれ作成されたと推定されている。

**磐井郡西岩井村絵図（元禄12年（1699））** 磐井郡のうち西岩井24カ村を描いたもので、そのうち五串村いつくしの中に「本寺」という文字が見える。これはもとの骨寺村であり、この時すでに、「骨寺」は「本寺」と呼ばれるようになっていたことがわかる。

**平泉雑記（安永2年（1773））** 平泉に関する文献の調査・掲載と考証、現地踏査や伝承を収録したもので、骨寺村は「骨寺」の項で紹介されている。「本寺」の地に骨寺という寺があったが今はなく、「骨」が「本」に変わった時期は不明、としている。

**風土記御用書出（安永4年（1775））** 仙台藩が領内の各村から提出させた書出である。その一つである五串村の書出に、本寺は「端郷本寺はごうほんでら」として記載され、名所や旧跡等がその由来とともに細かく書き出されている。その中には『陸奥国骨寺村絵図』や『中尊寺文書』の「骨寺村在家日記」にある

「六所明神、小名 若神子」、<sup>わかみ こ</sup>「山王社、小名 山王山」、<sup>ふどうのいわや</sup>「不動窟、小名 真坂」の別当が中尊寺の北本坊、西谷坊、小前沢坊であるとしている。西谷坊は経蔵別当職を世襲する大長寿院である。また、中尊寺の書出である<sup>かんざん ふ ど き</sup>「関山風土記」には、<sup>じ え つ か</sup>慈恵塚が中尊寺一山の惣持である（保持されている）ことが記されている。これらの記載から、本寺（骨寺）が中尊寺の荘園ではなくなった後も、形を変えて関わりが続いていることがわかる。

#### 4 骨寺村荘園遺跡の発掘調査成果

骨寺村荘園遺跡からは、縄文時代中期から弥生時代中期までの土器や石器が出土している。21年度調査で逆茂木が残る<sup>おとしあな</sup>陥穴を、22・23年度で楕円形の<sup>おとしあな</sup>陥穴を確認している。これらは駒形根神社西方の平泉野台地で発見しており、当該地は狩り場として機能していたことが想定される。また、不動窟でも縄文土器が出土しており、遺跡は丘陵部全体に分布するものと推定できる。

28年度調査では、平泉野台地南東部で縄文時代中期中葉の堅穴住居、土坑、ピット群からなる比較的規模の大きい集落を確認した。また、29年度調査では、平泉野台地北西部で自然堆積層中から縄文時代中期から弥生時代初頭の土器片が出土した。

不動窟では、縄文時代前期と弥生時代中期の土器が出土しているが、窟が利用されていたことを推定するまでには至っていない。その後、しばらくの間、村の様相を示す考古資料は見られない。

次に確認できるのは、9世紀後半ごろの<sup>はじき す え き</sup>土師器や須恵器である。21年度調査では、平泉野台地から9世紀後半ごろの内面黒色処理された土師器碗や須恵器が出土している。同時期とみられる土師器と須恵器は、24年度調査（景観保全農地整備事業に伴う緊急発掘調査）でも出土している。さらに、味ヶ沢でも同時期の須恵器片が採集されており、このあたりから村の開発が行われたようである。ただし、遺構との関係は依然として明確ではない。

12世紀に中尊寺経蔵別当領となったことと関係する調査成果もある。<sup>とおにし</sup>遠西遺跡からは、12世紀の<sup>とこなめようさんさんきん こ</sup>常滑窯産三筋壺と13世紀と推定される底部糸切りの小型かわらけが出土している。梅木田遺跡からは、遺構外ではあるが13世紀中頃～後半の<sup>りゅうせんようけいせいじしのざれんべんもんわん</sup>龍泉窯系青磁 鏝 蓮弁文碗が出土している。これら在家に関わる痕跡は本寺地区の北側丘陵部の裾部に分布し、絵図に描かれた散居形態をよく反映している。現在も山裾には屋敷が建ち並び、中世以来の景観を継承している。

さて、北側丘陵部東端に慈恵塚がある。22年度調査では塚本体および周辺の精査を行った。直径は約10m、最大高は約2.2mで、同心円状に溝と土塁を伴うことが判明した。この形態は北東北特有の巨大経塚と酷似（関根2009）しており、村を見下ろす立地からも経塚である可能性が高い。<sup>おおほりそうま</sup>大堀相馬<sup>ようさん</sup>窯産の土瓶や<sup>せ と ようさん</sup>瀬戸窯産の<sup>とうみょうぐ</sup>燈明具など近世以降の遺物が出土している。

周辺の慈恵大師に関わる石造物は近世後期に建てられたものである。地誌類の整理から、塚が慈恵大師伝承と結びついたのは『<sup>ほうない ふ ど き</sup>封内風土記』（1772）以降であることが推定できる。つまり、塚は近世後期に「慈恵塚」と称され、再顕彰されたものと推定できる。ちなみに絵図に描かれた「慈恵柄（塚）」やその図像は後筆であることが指摘されている（大石1984）が、後筆の時期も再顕彰された後であることが推定できる。

23年度には不動窟を調査した。窟は最大高約3m、奥行き約13mの自然洞窟である。壁面に燈明具を置くための穴が、入口部には貫を通した痕跡が見つかった。おそらくある時期において扉等で窟内部を閉塞し、燈明を灯した痕跡であると考えられる。

他の調査成果としては、梅木田遺跡でも掘立柱建物を確認しているが、陶磁器類も出土している。遠西遺跡でも近世と考えられる掘立柱建物が検出されているが、出土遺物が少ないため、年代の推定

が困難である。

以上のことから、骨寺村荘園遺跡は弥生時代以降の一時期を除き、縄文時代から現代まで人々が生活を営んでいた場所であることが想定できる。

(一関市教育委員会2015『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「1 位置と環境」を引用、加筆)



若神子社と田植えを終えた水田

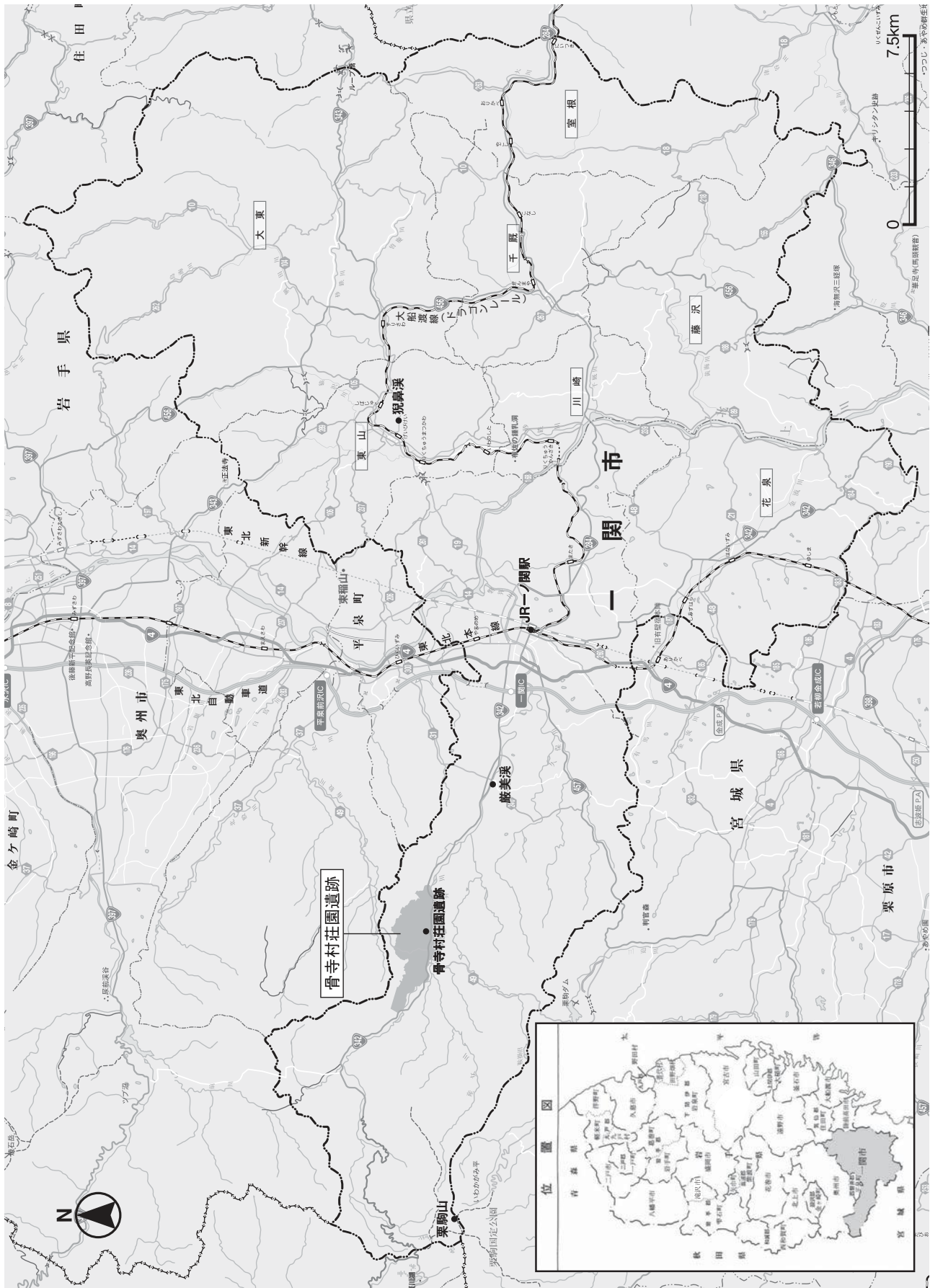


図1 骨寺村荘園遺跡位置図

## 2 調査に至る経緯

### (1) 骨寺村荘園遺跡に係るこれまでの取り組み

平成5年2月	本寺地区全住民を会員とする美しい本寺推進本部発足、伝骨寺跡を調査
平成7年4月	『陸奥国骨寺村絵図』が国指定重要文化財となる
平成7年度	陸奥国骨寺村調査委員会（委員長、東北学院大学教授大石直正氏）発足 歴史地理・民俗、地方文書、石造物の調査部会
平成8～10年度	骨寺村荘園総合調査 一関市教育委員会主体の調査を開始、1/2000ベースマップを作成
平成11年度	中屋敷遺跡確認調査、総柱の掘立柱建物確認、用途不明の金属製品出土
平成12年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認
平成13年度	中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、圃場整備と遺跡保存について調整を検討 遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡、かわらけ片、常滑三筋壺片出土 中世骨寺村荘園遺跡整備委員会、整備と保存の方向について答申、「骨寺村 荘園遺跡」の景観保全型の整備を提案、史跡と営農の調和を図り、文化財を 活かした地域づくりの方向性を示す
平成14年度	遠西遺跡確認調査、掘立柱建物跡確認
平成15年度	荘園遺跡属性確認調査
平成15年6月	骨寺村荘園遺跡が「平泉の文化遺産」の資産に追加
平成15年8月	骨寺村荘園遺跡調査整備指導委員会設置
平成16年3月	本寺地区地域づくり推進協議会発足、景観保全・活用、世界遺産登録に向 け、集落営農、圃場整備等の課題に取り組む
平成16年度	若神子社周辺の確認調査
平成17年3月2日	骨寺村荘園遺跡の国史跡指定が告示される 文部科学省告示第22号 (山王窟、白山社及び駒形根神社、梅木田遺跡、伝ミタケ堂跡、遠西遺跡、 要害館跡、若神子社、不動窟、慈恵塚及び大師堂(拝殿))
平成17年度	平泉野遺跡確認調査、縄文時代の石器出土
平成18年度	駒形根神社境内確認調査、字若神子東端の確認調査
平成18年7月28日	本寺地区の平野部を中心とした337.5haが国内2番目の重要文化的景観に選 定 文部科学省告示第121号
平成18年9月14日	政府が「平泉の文化遺産」を世界文化遺産へ推薦することを決定、世界遺産 条約関係省庁連絡会議
平成18年12月26日	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉―浄土世界を基調とする文化的景観」と した世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界遺産センターに提出
平成19年度	駒形151-1、153-1確認調査、縄文土器片、石器等出土
平成19年8月26～30日	イコモス現地調査
平成20年5月	イコモス「登録延期」を勧告
平成20年6月14日	岩手・宮城内陸地震（マグニチュード7.2）発生。震源地は本寺地区の西方 約3km

平成20年7月	世界遺産委員会で「平泉—浄土世界を基調とする文化的景観」の登録延期が決定
平成21年度	平泉野遺跡（若井原188番外地点）確認調査、縄文土器、石器剥片、陥穴、9世紀代の須恵器と土師器出土
平成21年4月4日	国際専門家会議、推薦書作成委員会において、平成23年の世界遺産登録を目指す資産の絞り込みが提案され、世界遺産登録後の対応資産として、骨寺村荘園遺跡、長者ヶ原廃寺跡、白鳥館遺跡、達谷窟の4資産が調査の進展により段階的に拡張登録を目指す方針を確認
平成22年1月	「平泉の文化遺産」の名称を「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」とした世界文化遺産登録推薦書をユネスコ世界文化遺産センターに提出
平成22年度	慈恵塚現状確認調査、精査および三次元測量の実施、近世地誌類や出土遺物、石造物の整理から慈恵大師伝承と古塚が結びついたのは近世後期と推定 平泉野遺跡（若井原194-1地点）確認調査、縄文時代の焚火跡を確認
平成22年9月8・9日	イコモス現地調査、調査員ワン・リジュン氏（中国イコモス国内委員）
平成23年3月11日	14時46分頃、マグニチュード9.0の巨大地震発生（震災名：東日本大震災）
平成23年度	不動窟確認調査、精査及び三次元測量の実施、貫痕と燈明台の痕跡を確認 白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴確認
平成23年5月	イコモス「登録」を勧告
平成23年6月29日	世界遺産委員会で「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の登録が決定 但し、柳之御所遺跡は除く
平成23年11月14日	第1回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年3月22日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年度	白山社及び駒形根神社確認調査、縄文時代の陥穴、十和田 a 火山灰確認 伝ミタケ堂確認調査、自然決壊による崩落岩盤確認 不動窟確認調査、基盤層とみられる自然堆積層確認
平成24年5月18日	第3回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成24年9月25日	骨寺村荘園遺跡を含む「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群（拡張）」が世界文化遺産暫定一覧表に記載
平成24年10月26日	「平泉の文化遺産」拡張登録に関係者（県教育長、二市一町首長）会議 開催 拡張登録に係る方針と調査計画を合意
平成25年1月30日	第4回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成25年度	伝ミタケ堂跡確認調査、遺構・遺物ともに発見されず 不動窟確認調査、窟前面に3基の柱穴を確認 白山社及び駒形根神社（中川6地点）確認調査、土地造成と掘立柱建物確認 梅木田遺跡確認調査、13世紀とみられる龍泉窯系青磁鎚蓮弁文碗片出土
平成25年11月22・23日	平成25年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成26年1月7日	第5回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成26年度	白山社及び駒形根神社（中川4、6地点）確認調査、中川4地点の塚の自然科学分析を実施、13世紀後半と推定



	梅木田遺跡確認調査、近世中後期の遺構変遷を推定
平成26年11月29・30日	平成26年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成27年1月6日	第6回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成27年1月26日	本寺地区の一部6.7haが重要文化的景観に追加選定 文部科学省告示第6号
平成27年度	白山社及び駒形根神社（中川6地点）確認調査、平場の造成時期を17世紀以降と結論付け 梅木田遺跡確認調査、17世紀以降掘立柱建物確認 平泉野遺跡（若井原194-115地点）確認調査、17世紀以降の段切り造成区画確認
平成27年11月14・15日	平成27年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成28年1月5日	第7回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年度	梅木田遺跡確認調査、掘立柱建物確認 白山社及び駒形根神社（駒形5、若井原194-1地点）確認調査、縄文土器、住居跡確認 平泉野遺跡（中川9、若井原194-115地点）確認調査、35m以上の溝確認、塚の構築年代を16世紀遺構と結論付け 山王窟三次元測量
平成28年8月4～6日	平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会 開催 （第8回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成28年10月3日	第9回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成28年12月3・4日	平成28年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 開催
平成29年1月12日	第10回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成29年度	平泉野遺跡（中川9、若井原194-1地点）確認調査、側溝とみられる溝2条、竪穴状遺構確認
平成29年6月22日	第11回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成29年8月5日	「平泉の文化遺産」国際会議 開催（平成29年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会と位置付け）
平成29年8月6日	第2回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録委員と海外専門家との意見交換会 開催（第12回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会と位置付け）
平成29年9月8日	第13回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成30年3月7日	第14回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
平成30年度	平泉野遺跡（中川9、若井原194-1、194-2地点）確認調査、竪穴状遺構、フラスコ状土坑確認 駒形45-4地点確認調査、柱穴、土坑確認
平成31年3月23日	第15回平泉の文化遺産世界遺産拡張登録検討委員会 開催
令和元年度	駒形45-4地点確認調査

## （２）令和元年度調査に至る経緯

一関市教育委員会は、平成８年度から骨寺村荘園遺跡の調査を始め、11年度から発掘調査を実施している。目的は、『陸奥国骨寺村絵図』の現地である本寺地区で、絵図に描かれた田圃、在家、宗教施設の痕跡を確認することである。

調査の結果、本寺地区北側の山裾には在家とみられる遺構が多く、その一部から中世の遺物が出土した。そのことは、遺構の時代も中世まで遡ることを示唆している。一方、宗教施設の調査については、中世に遡る遺構・遺物の発見には至っていない。村落遺跡としての把握は進んでいるものの、宗教施設の調査では明確な成果を挙げられていないのが現状である。

市教育委員会は、15年から骨寺村荘園遺跡を平泉の文化遺産の一つとして、世界文化遺産への登録を推進してきた。しかし、20年に平泉は登録延期となったため、21年に登録推進の資産候補の絞り込みが提案された。そして、骨寺村荘園遺跡は更なる調査研究が必要と判断され、資産候補から外れ拡張登録を目指すことになったのである。

そのため、市教育委員会は7カ年の発掘調査計画を立て、特に宗教施設に関わる調査を中心に実施してきた。そうした中、23年に「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」が世界文化遺産に登録され、翌24年には、骨寺村荘園遺跡のほか、柳之御所遺跡（平泉町）、達谷窟（平泉町）、白鳥館遺跡（奥州市）、長者ヶ原廃寺跡（奥州市）の5つの拡張予定資産が、世界遺産暫定一覧表に記載された。

これを受け、拡張登録を目指す関係区市町間で25～29年度の5カ年で重点調査を実施することを確認した。この重点調査で成果を積み重ねたが、拡張登録につながる顕著な普遍的価値の証明に至らないとの結論に達し、関係区市町で30年度以降も調査を継続することで合意した。

令和元年度は、平成21年度からの発掘調査計画を改定した第2期計画（平成29～令和3年度）の3年目にあたる。また、上記のとおり関係区市町で拡張登録を目指す各資産で調査を継続することを取り決めていること、29年度の骨寺村荘園遺跡指導委員会で、平泉野遺跡のある丘陵部だけでなく平野部の調査もするべきとの意見をいただいております、地権者の了解を得て30年度に引き続き駒形45-4地点の調査を実施した。

これまで（平成11～令和元年度）調査した地点を図2-1、図2-2、表1に示した。

（一関市教育委員会2019『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』「2 調査に至る経緯」を引用、加筆）

（菅原）

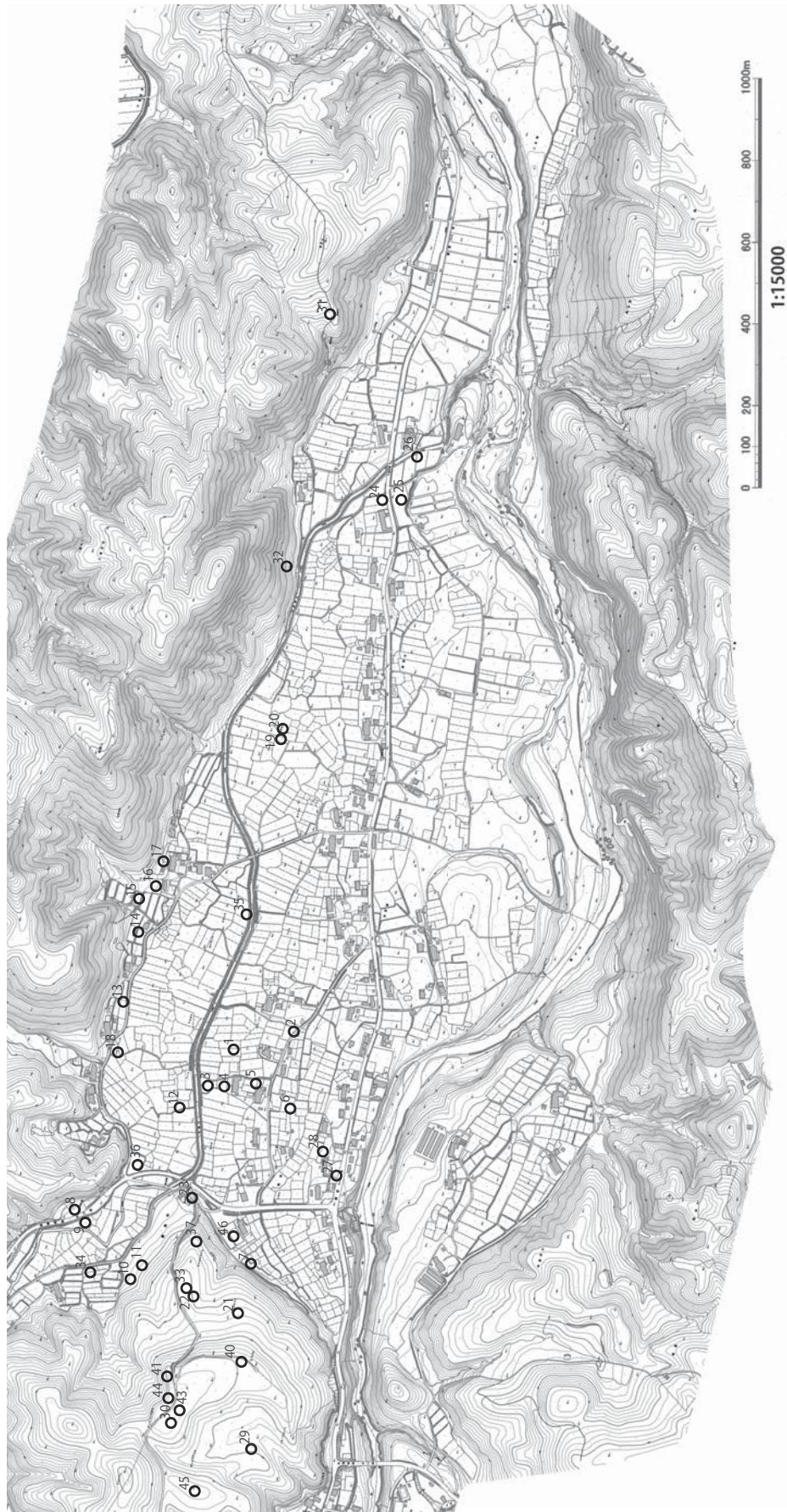


図2-1 骨寺村荘園遺跡における既調査地点(1)

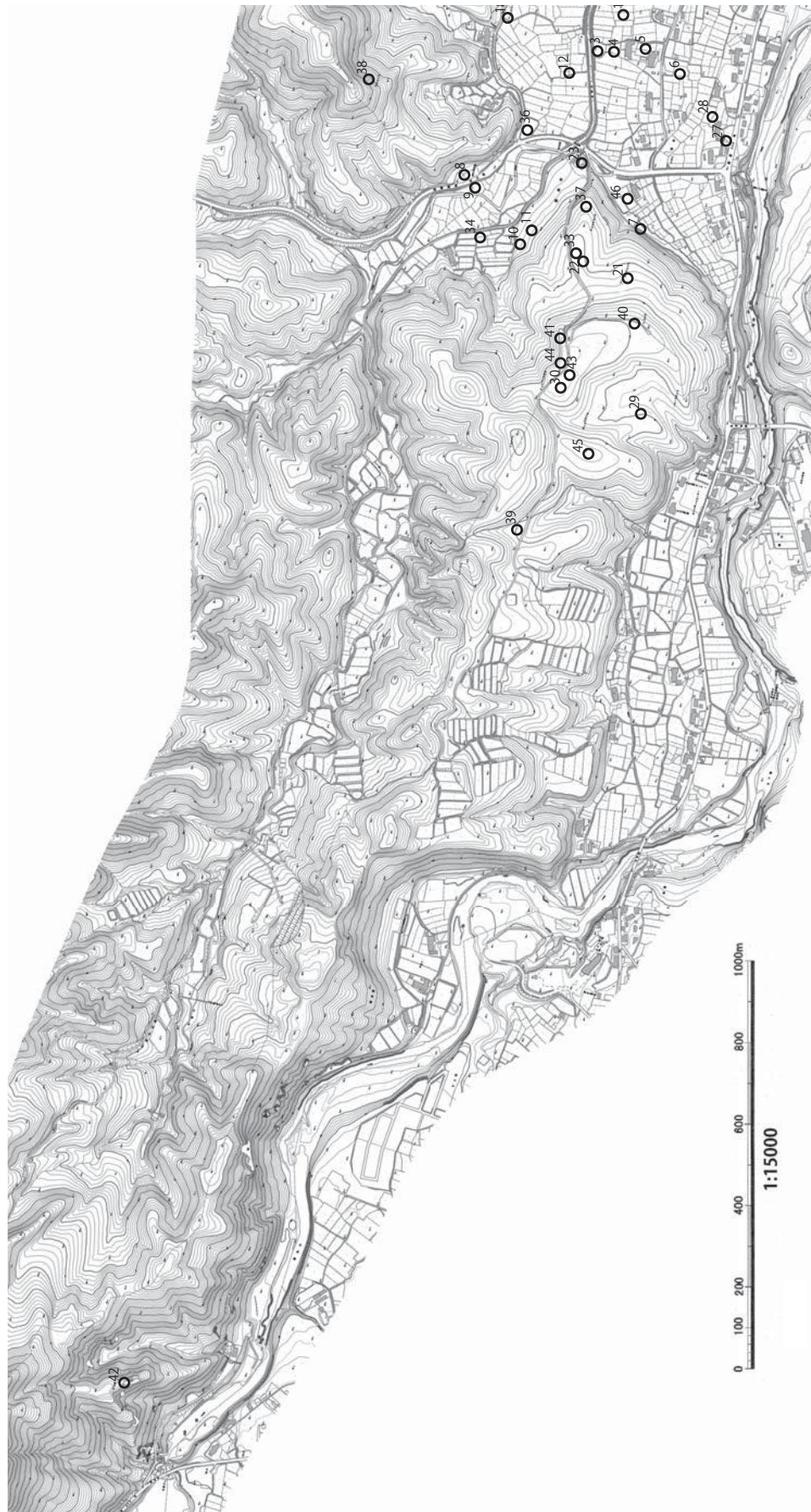


図 2-2 骨寺村莊園遺跡における既調査地点(2)

番号	調査地	遺構・遺物	調査年度
1	沖要害52-1	なし	平成11年度
2	沖要害72、77、本寺中屋敷遺跡	掘立柱建物、石組井戸、銅製品	平成11年度
3	駒形85-1	柱穴、柱根、木製品	平成11年度
4	駒形86	小穴	平成11年度
5	駒形89-2	銅製品	平成11年度
6	駒形96-1、107-1	なし	平成11年度
7	駒形40-2、44	なし	平成11年度
8	中川32-1、梅木田遺跡	掘立柱建物、溝、柱根、陶器、中国産磁器	平成12・25～27年度
9	中川28-1、35	なし	平成12年度
10	中川6	近世造成面、掘立柱建物、建物礎石、池状遺構、近世磁器	平成12・25～27年度
11	中川4	塚	平成25・26年度
12	要害141-4、146-3	なし	平成12年度
13	要害118、119	なし	平成13年度
14	要害79-1、114-1、115-21、遠西遺跡	掘立柱建物、柱穴、土坑、井戸、溝、柱根、常滑三筋壺片、かわらけ片	平成13・14年度
15	要害70、72	柱穴、井戸、焼土・炭化物	平成14年度
16	要害69-1	なし	平成13年度
17	要害23、54-1	近世板蔵基礎	平成13年度
18	要害127-2	なし	平成14年度
19	若神子31-2、若神子社	石祠	平成16年度
20	若神子43、45、46	なし	平成16年度
21	駒形5、白山社及び駒形根神社	炭窯跡	平成17年度
22	駒形5、白山社及び駒形根神社	石匙	平成17年度
23	駒形8-1、白山社及び駒形根神社	小穴、石鏃、銭	平成18年度
24	若神子85-3、87-1、90-4、92-2	なし	平成18年度
25	若神子88-1	なし	平成18年度
26	若神子81、86-1、86-4	なし	平成18年度
27	駒形153-1	なし	平成19年度
28	駒形151-1	溝、縄文土器片、石器	平成19年度
29	若井原188、194-35、194-36、平泉野遺跡	落とし穴、旧流路、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片	平成21年度
30	若井原194-1、平泉野遺跡	焚火跡、縄文土器片、石器剥片	平成22年度
31	下真坂25-5、慈恵塚	近世陶磁器、近世銭	平成22年度
32	下真坂80-2、不動窟	洞窟、柱穴、縄文土器片、弥生土器片、石器剥片、近世銭	平成23～25年度
33	駒形5、白山社及び駒形根神社	土坑、縄文土器片、石器	平成23年度
34	中川19-1	土坑、縄文土器片、石器	平成20年度
35	要害59-1	小穴	平成20年度
36	要害194-1、194-2	柱穴、土師器片、須恵器片	平成23・24年度
37	駒形7、白山社及び駒形根神社	落とし穴、縄文土器片、石器剥片	平成24年度
38	要害204-1、伝ミタケ堂跡	なし	平成24・25年度
39	若井原194-115、平泉野遺跡	近世磁器、縄文土器片	平成27・28年度
40	若井原194-1、駒形5、白山社及び駒形根神社	竪穴住居、土坑、溝、縄文土器片、土偶、石器、近世陶磁器片	平成28年度
41	中川9、平泉野遺跡	道路遺構	平成28・29年度
42	若井原194-33、山王窟	近世石造物	平成28年度
43	若井原194-1、平泉野遺跡	竪穴状遺構、縄文土器片、弥生土器片	平成29・30年度
44	中川9、平泉野遺跡	土坑、縄文土器片、石器、陶器片	平成30年度
45	若井原194-2、平泉野遺跡	溝	平成30年度
46	駒形45-4	土坑、ピット、縄文土器片、石器、土師器片、須恵器片、陶磁器片	平成30・令和元年度

※番号は図2-1、図2-2と対応

表1 骨寺村荘園遺跡における既調査地点一覧表

### 3 駒形45-4地点の調査

調査地点は、駒形根神社の南西約150mにあり、一関市巖美町字駒形45-4に所在する（図2-1-46・図3）。平泉野台地と呼ばれる丘陵の南東裾が南西に張り出した部分に位置し、標高は約178～180mである。現況は、北側が高く、南側が低い、段々の水田であり、その東側はもともと低湿地であったという。

駒形根神社の別当家である平山家（屋号は「テラサキ」）の屋敷の裏手にあたり、さらにその北側の丘陵斜面部は「テラサキヤマ」、「テラサキウシロ」と呼ばれている。屋敷地北端には「お明神様」の石祠が3基祀られ、西端付近には元禄二年（1689）の墓標が建つ。墓標からは「元禄二年」「浄岩禪定門」「六月九日 平兵衛子」「七口立之」の文字が読み取れ、本寺地区で年号が確認できる最古の石造物である。

「テラサキ」は、『陸奥国骨寺村絵図』簡略図で「骨寺跡」や「白山」の文字とかつて建物があったことを示す柱を表現したとみられる丸印のある丘陵の左（南）の山裾あたりに記されている「寺崎」である可能性があることから、遺構の有無、特に「骨寺（堂）跡」の痕跡を確認するために昨年度に引き続き、実施した。

調査期間は令和元年6月3日～7月4日および9月30日～10月17日（実働28日）、調査面積は146m<sup>2</sup>である。

調査地点は、昭和30年代に緩斜面の畑だったものを造成して段々の水田（現況3枚）にしており、昨年度、一段高い北西側の田に1トレンチ、その南側の一段低い田に2トレンチ、東側の田に3トレンチを設け、調査した。

今年度は、南側の田の西端に4トレンチ、同じく東端に5トレンチ、東側の田の3トレンチの西に接して6トレンチを設定し、重機を用いて表土を除去した後、遺構の確認を行った。

さらに4トレンチと2トレンチをつなぐ7トレンチA、2トレンチと5トレンチをつなぐ7トレンチBを設定し、人力により表土を除去した後、遺構の確認を行った。

平面図の作成はトータルステーションによる実測と手作業による実測を併用した。また、断面図（図4・5）の実測はレベルを用いて水平を設定し手作業により行った。写真撮影は一眼レフデジタルカメラを用いた。

利用した測量基準杭の成果は以下の通りである。

基H28-14 X=-113645.925、Y=+9955.506、H=178.142

基H28-15 X=-113612.614、Y=+9931.297、H=179.599

調査の結果、遺構は確認できなかった。遺物は、表土および耕作土層から近世・近代の陶磁器片等が、4トレンチのIV層上面から縄文土器の細片が出土したが、遺構に伴うものではない。

#### 1 基本土層

**I a・I b層** 10YR2/3～10YR3/1黒褐色シルト。粘性なし。しまり中。にぶい黄橙色の岩粒（φ2～5mm）を少量、明黄褐色シルトを斑状に微量含む。現水田耕作土。

**II a・II b層** 10YR2/2黒褐色シルト。粘性なし。しまり極めて強。黄褐色～にぶい黄橙色の岩粒（φ2～30mm）を多量、亜円礫（～20cm大）を微量含む。昭和30年代の土地造成層。

**III a・III b層** 10YR2/3～10YR3/1黒褐色シルト。粘性なし。しまり中～強。黄褐色～にぶい黄橙色の

岩粒（φ 2～10mm）を多量、亜円礫（～2cm大）を微量含む。昭和30年代以前の畑耕作土。

**IV a～IV g層** 10YR2/1黒色～10YR2/3黒褐色シルト主体のIV a・b・d・f 層と10YR4/3にぶい黄褐色～10YR6/4にぶい黄橙色シルト主体のIV c・e・g層に大別され、互層状をなす。粘性を帯びる層は、しまりも強い。黄褐色～にぶい黄橙色の岩粒（φ 2～5mm大）を微量～少量含む。埋没した沢の堆積土。

**V層** 10YR5/6黄褐色粘土。粘性極めて強。しまり極めて強。地山。

## 2 出土遺物

調査の結果、I層（表土）および排土から縄文時代の石器（石鏃、石匙か、2次加工のある剥片）、古代の土器片（須恵器）、近世・近代の陶磁器片、石製品（砥石）、鉄製品（釘）が出土した。

また、4トレンチのIV層上面で縄文時代早期～前期と考えられる縄文土器深鉢の細片が出土したが、遺構に伴うものではない。

出土遺物は全点、遺物観察表（表4）に掲載した。

## まとめ

昨年度調査に引き続き、駒形45-4地点を調査した。遺構は確認できず、遺物も表土・耕作土層から出土した近世・近代の陶磁器片が主で、遺構に伴うものではない。

『陸奥国骨寺村絵図』にある「骨寺（堂）跡」等の痕跡を確認することはできなかった。

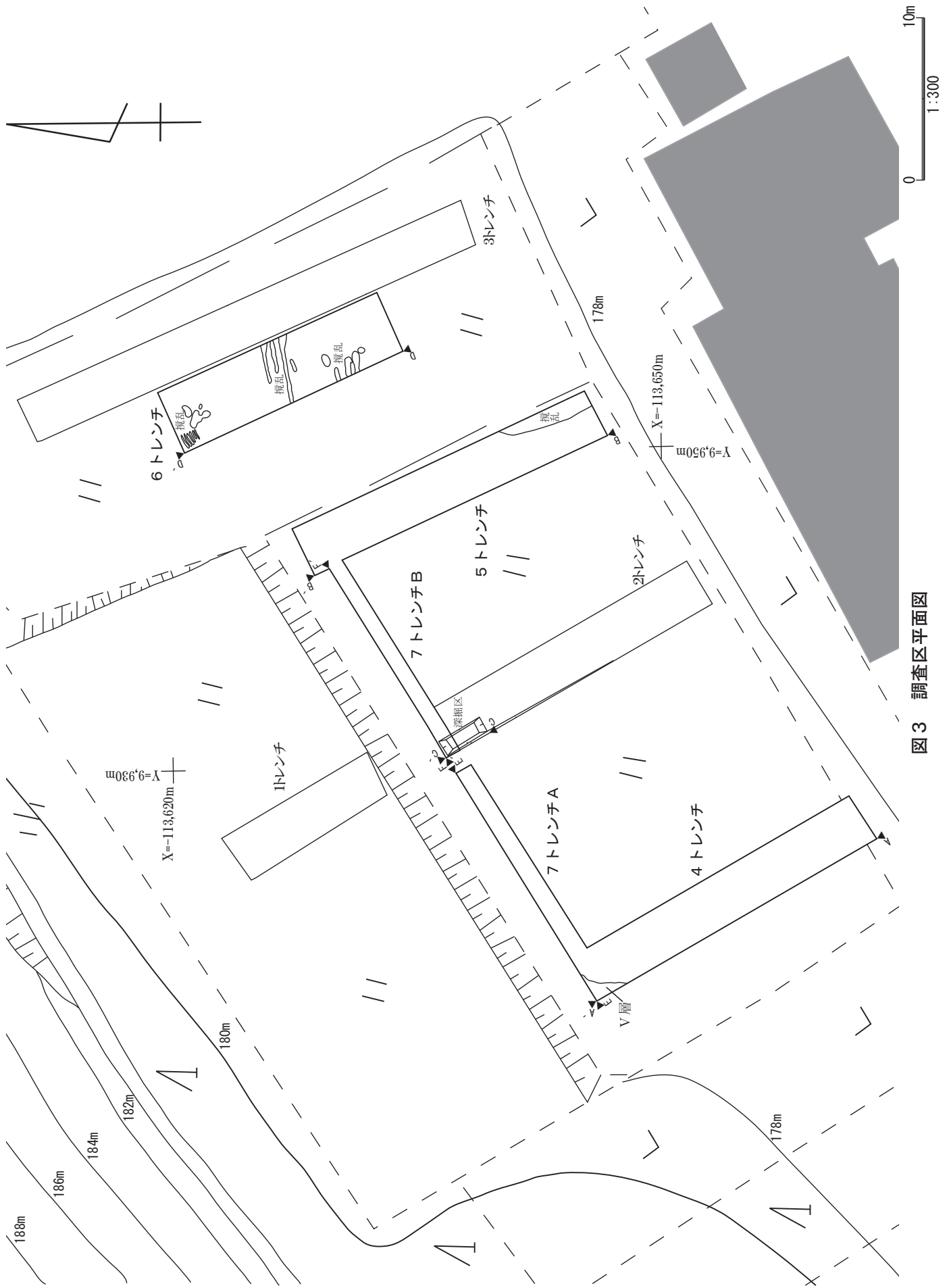
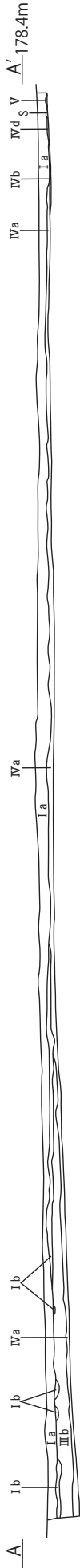


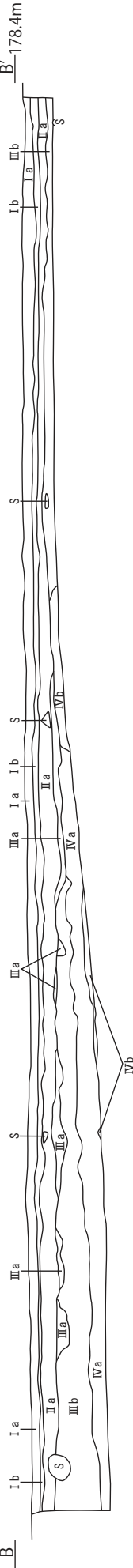
図3 調査区平面図



4 トレンチ 西壁

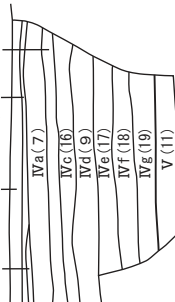


5 トレンチ 西壁



2 トレンチ 北西端 深掘区

C-178.4m



土層注記

- Ia 10YR2/3黒褐色シルト。粘性なし。しまり中。にぶい黄褐色の岩粒(径2~5mm)および明黄褐色シルトの細粒(径5mm)を疎状に少量含む。
- Ib 現代の水田耕作土上層。(昨年度調査2トレンチ北西端深掘区の1に対応)
- Ic 10YR3/1黒褐色シルト。粘性なし。しまり強。にぶい黄褐色の岩粒(径2~5mm)を微量含む。
- Id 現代の水田耕作土下層。(昨年度調査2トレンチ北西端深掘区の2に対応)
- Ie 10YR2/2黒褐色シルト。粘性なし。しまり極めて強。黄褐色ににぶい黄褐色の岩粒(径2~30mm)を多量、珪円礫(径20cm大)を微量、炭化物粒を極めて微量含む。
- If 昭和50年代の土地造成層上層。(昨年度調査2トレンチ北西端深掘区の4に対応)
- Ig 10YR2/2黒褐色シルト。粘性なし。しまり極めて強。黄褐色の岩粒(径1~10mm)を多量、にぶい黄褐色の岩粒(径3mm大)を微量、珪円礫(径3~5cm)を所々に含む。
- Ih 昭和30年代の土地造成層上層。
- Ii 10YR3/1黒褐色シルト。粘性なし。しまり強。にぶい黄褐色の岩粒(径2~5mm)を少量、黄褐色の岩粒を微量含む。
- Ij 旧畑耕作土上層。
- Ik 10YR2/3黒褐色シルト。粘性なし。しまり中。黄褐色の岩粒(径1~5mm)を多量、にぶい黄褐色の岩粒(径2~10mm)を少量、炭化物粒を極めて微量、小円礫(径0.5~1.5cm)・珪角礫(径1cm)を含む。
- Il 旧畑耕作土下層。
- Im 10YR2/1黒色シルト。粘性なし。しまり中。暗褐色シルトブロックを部分的に少量、黄褐色の岩粒(径1~5mm)を含む。
- In 埋没した沢の堆積土。(昨年度調査2トレンチ北西端深掘区の7に対応)
- Io 10YR3/2黒褐色砂質シルト。粘性なし。しまり中。黒褐色砂質シルトブロックをやや多く、にぶい黄褐色の岩粒(径5mm大)を少量含む。
- Ip 埋没した沢の堆積土。(昨年度調査2トレンチ北西端深掘区の13に対応)
- Iq 埋没した沢の堆積土。(昨年度調査2トレンチ北西端深掘区の16に対応)
- Ir 10YR2/3黒褐色粘土質シルト。粘性ややあり。しまり極めて強。黄褐色の岩粒を微量、炭化物粒を極めて微量含む。
- Is 埋没した沢の堆積土。(昨年度調査2トレンチ北西端深掘区の9に対応)
- It 10YR6/4にぶい黄褐色シルト。粘性あり。しまり強。黒褐色シルトブロックを多量、炭化物を極めて微量含む。
- Iu 埋没した沢の堆積土。(昨年度調査2トレンチ北西端深掘区の17に対応)
- Iv 10YR2/1黒色粘土。粘性あり。しまり強。
- Iw 埋没した沢の堆積土。(昨年度調査2トレンチ北西端深掘区の18に対応)
- Ix 10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト。粘性なし。しまり中。にぶい黄褐色の岩粒(径5mm大)を含む。
- Iy 埋没した沢の堆積土。(昨年度調査2トレンチ北西端深掘区の19に対応)
- Iz 10YR5/6黄褐色粘土。粘性極めて強。しまり極めて強。
- V 地山。(昨年度調査2トレンチ北西端深掘区の11に対応)

図4 調査区壁面土層断面図(1)

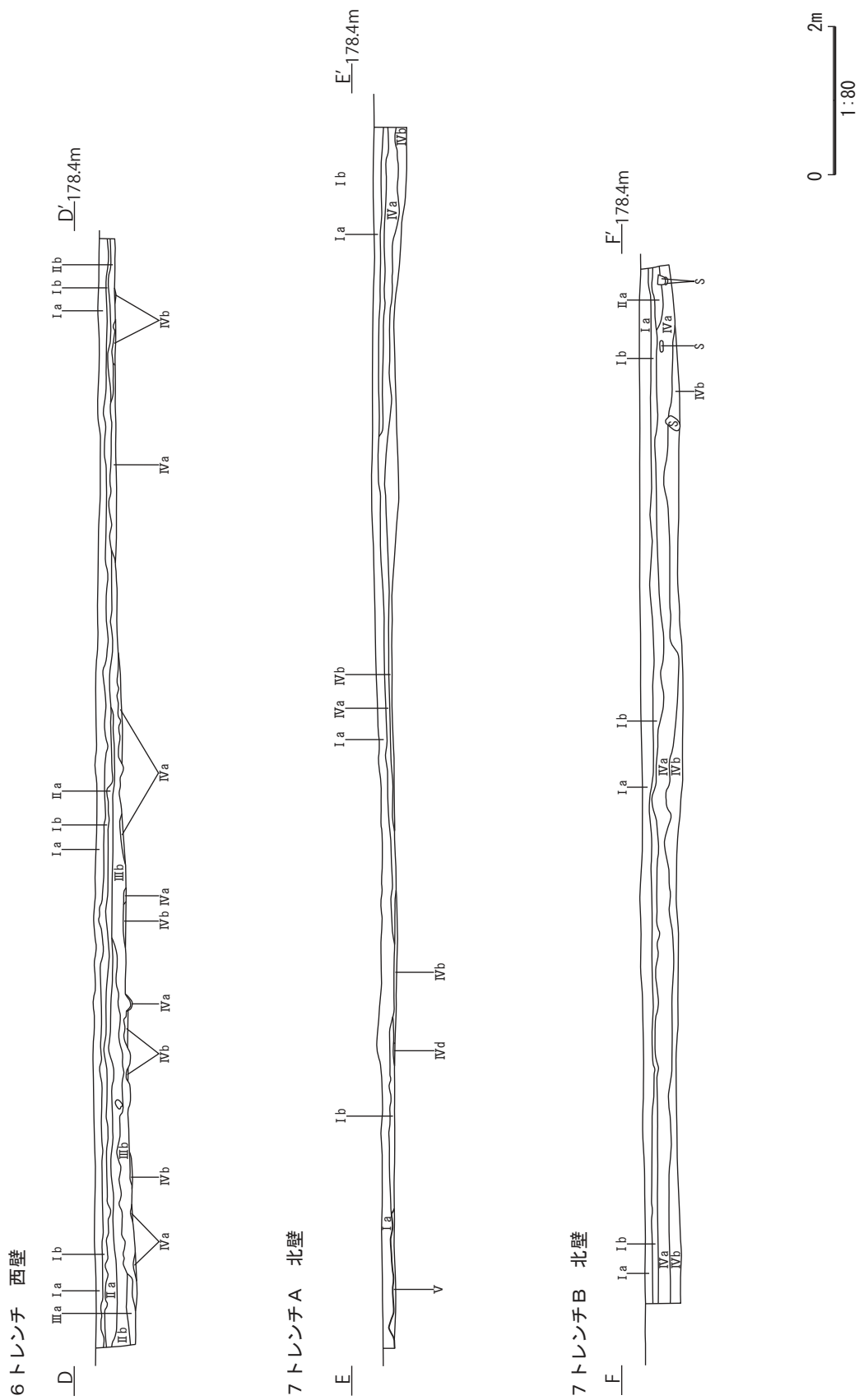


図5 調査区壁面土層断面図(2)

## 4 白山社及び駒形根神社の踏査

令和元年12月1日および12月3日、白山社及び駒形根神社の踏査を行った。

踏査地点は若井原公葬地の北側および東側の丘陵上にあたる（図6、写真1）。範囲は東西約170m、南北約130m、面積約22,000m<sup>2</sup>、踏査範囲の現況は、山林である。

踏査を行った動機は、ここが『陸奥国骨寺村絵図』簡略図（図7）に描かれている「岩井河」、「うなね（社）」（括弧内は筆者補記）から南西方向に屈曲して延びる「道」、丘陵裾部（あるいは可耕地）を表しているとみられる「破線」が重なり合う地点であり、さらに丘陵の先端部が馬の背状に丁寧な描写され、丘陵の先端を意味するとみられる崎（サキ）が含まれる地名「寺崎」、「白山（社）」（括弧内は筆者補記）の文字とかつて建物があつたことを示す柱を表現したとみられる「丸印」が書かれている場所であると考えたためである。

踏査の結果、東西2か所の平坦面を確認した。

東側平坦面（図6、写真2～5）は、東西約45m、南北約30mの範囲で、丘陵頂部（現白山社付近）から南西に延びる緩やかな斜面から派生した、丘陵裾部が最も南側すなわち「岩井河」、「道」へ張り出す部分の直上に位置する。

また、西側平坦面（図6、写真6～9）は、東西約55m、南北約45mの範囲で、丘陵頂部（現白山社付近）から南西に延びる緩やかな丘陵斜面の先端付近に位置する。さらに南西方向に向かう傾斜角度がきつくなる変換線の手前までを平坦面として捉えた。ここは地元では「ハカノウエヤマ」と呼ばれている。

両平坦面とも、地表に顕在する遺構は確認できなかった。

『陸奥国骨寺村絵図』詳細図に骨寺村の東の入口として描かれている「鎰懸」は、当然のことながら村の可耕地の東端でもある。「石ハ井河」、「古道」との接点は狭窄部となっており、丘陵頂部には宗教施設としての慈恵塚が存在する。

一方、「寺崎」は村の可耕地の西端であり、「鎰懸」と同様、「岩井河」、「道」との接点は狭窄部となっており対照的である。この丘陵先端付近に絵図に描かれているとおりに宗教施設としての「白山（社）」（括弧内は筆者補記）、北側にやや離れて「骨寺跡」が存在していた可能性を指摘しておく。

今後、周辺の詳細な地形測量や発掘調査が必要である。

（山川）



図6 骨寺村莊園遺跡(若井原公墓地北側)踏査図

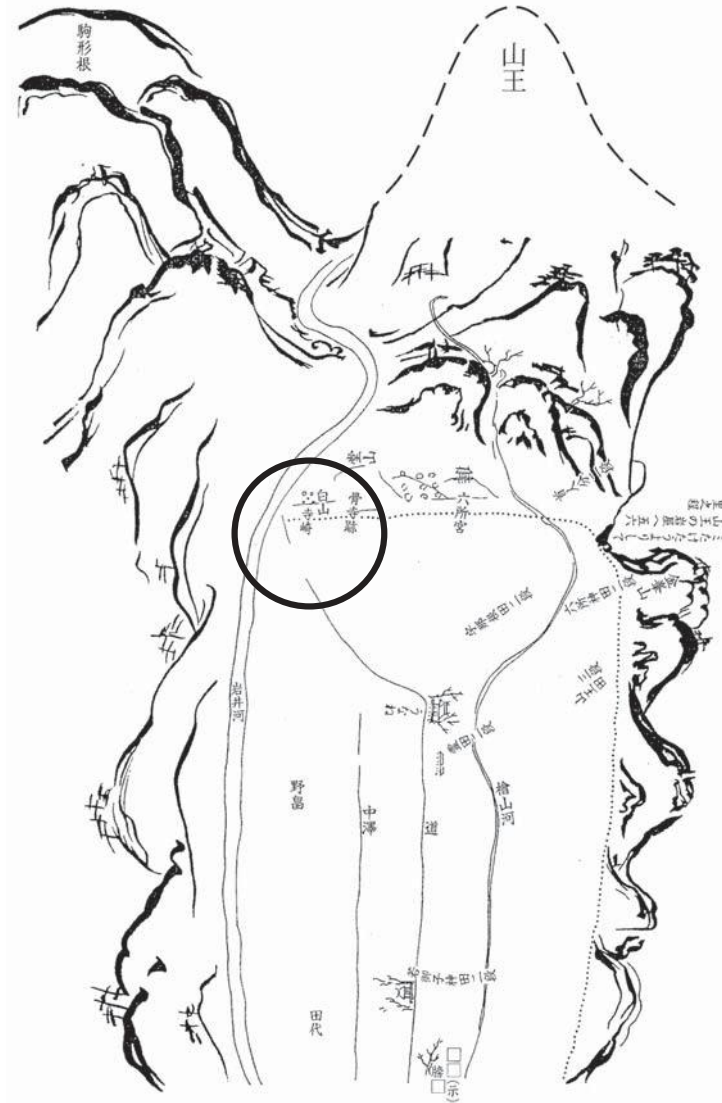


図7 『骨寺村絵図（簡略図）』復原図

鈴木弘太 2017 「『陸奥国骨寺村絵図』を復元する―大石直正氏の研究成果をもとに―」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究総括報告書』 一関市博物館 に○を加筆



写真1 踏査地区遠景(南東から)



写真2 東側平坦面遠景(南西から)



写真3 東側平坦面を南西から見上げる



写真4  
東側平坦面から西(須川岳)方向を望む



写真5  
東側平坦面から南東(四度花山)方向を望む



写真6 西側平坦面を南東から見上げる



写真7 西側平坦面(東から)



写真8  
西側平坦面から西(須川岳)方向を望む



写真9  
西側平坦面から南方向を望む

## 5 骨寺村荘園遺跡（駒形45-4地点）における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

骨寺村荘園遺跡（駒形45-4地点）は、岩手県一関市巖美町字駒形45-4（北緯38° 58′ 35″、東経140° 56′ 52″）に所在する。測定対象試料は、平成30年度に調査された2トレンチ北西端深堀区で検出された土層（図4下段参照）から採取された土壌と炭化物の合計9点である（表2）。

試料が採取された土層は、上位から16層、9層、17層、18層の順で、16層と17層が北側の丘陵部からの土砂崩壊により広範囲に堆積したと見られる土層、9層と18層がそれら崩壊土直下の自然堆積層と捉えられている。各層から2袋の土壌サンプルが採取され、各袋の土壌を1試料として扱った。17層の土壌サンプルからは炭化物の細片が検出されたため、2袋から集めた炭化物を1試料とした。

### 2 測定の意義

層の堆積年代を検討する。

### 3 化学処理工程

#### （1）炭化物の化学処理

- 1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l（1M）の塩酸（HC1）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

#### （2）土壌の化学処理

- 1) 試料を超純水の中に入れ、超音波で分散させた後、ふるいにかけて根等の混入物を除去する。ふるいを通過した土を乾燥させ、この後の処理に用いる。
- 2) 酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には1 mol/l（1M）の塩酸（HC1）を用い、表1に「HC1」と記載する。

以下、（1）3）以降と同じ。

### 4 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度（<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C）、<sup>14</sup>C濃度（<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（H0x II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

## 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2)  $^{14}\text{C}$ 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$ 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい ( $^{14}\text{C}$ が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 ( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma=68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma=95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.3較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

## 6 測定結果

測定結果を表2、3に示す。

土壌試料の $^{14}\text{C}$ 年代は、8090 $\pm$ 30yrBP (2トレンチ18層-2) から5920 $\pm$ 30yrBP (2トレンチ16層-1) の間にある。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、最も古い2トレンチ18層-2が7083~7046cal BCの範囲、最も新しい2トレンチ16層-1が4836~4730cal BCの間に3つの範囲で示される。各層で測定された2点の試料は、おおむね近い値を示した。層の上下関係に対して、9層と17層の年代値が逆転しているが、全体的には上下関係と大きく矛盾しない結果である。2トレンチ16層-1、2が縄文時代前期初頭頃、9層-1、2、17層-2、3が早期後葉頃、18層-1、2が早期中葉頃に相当する (小林2017、小林編2008)。

炭化物試料2トレンチ17層-1の $^{14}\text{C}$ 年代は8340 $\pm$ 30yrBP、暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は7483~7361cal BCの間に3つの範囲で示され、縄文時代早期中葉頃に相当する (小林2017、小林編2008)。同じ17層の土壌試料より古い値となった。

以上の結果において、9層と17層の土壌試料の間で年代値が逆転していることと、17層で炭化物の細片を集めた試料が土壌より古い値を示したことが注意される。土壌試料では、土壌に含まれる有機



物のうち、ふるいや化学処理で除去されなかったものが測定されており、炭素の由来があまり明確でない。また、丘陵から崩壊した土層の再堆積などが起こっている場合、有機物がどの段階のものかということも考慮する必要がある。これらのことから、今回測定対象となった土層には、層の形成年代とは異なる年代のものがある程度含まれる可能性がある（古い炭化物の混入など）。

試料の炭素含有率を確認すると、2トレンチ17層-1の炭化物は64%の適正な値、9層、17層、18層の土壌は1.8%（2トレンチ17層-3）から5.7%（2トレンチ18層-1）で、土壌として特に低くない値である。土壌2トレンチ16層-1は0.6%、同-2は0.9%で、やや低い値となっており、他の試料よりも測定された炭素の由来に注意を要する。

## 【文献】

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360
- 小林謙一 2017 縄文時代の実年代 —土器型式編年と炭素14年代—, 同成社
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55 (4), 1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

[IAA登録番号：#9575]

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-183027	2トレンチ16層-1	丘陵崩壊土 第16層	土壌	HC 1	-18.07 ± 0.38	5,920 ± 30	47.84 ± 0.17
IAAA-183028	2トレンチ16層-2	丘陵崩壊土 第16層	土壌	HC 1	-17.89 ± 0.42	5,950 ± 30	47.69 ± 0.17
IAAA-183029	2トレンチ9層-1	自然堆積土 第9層	土壌	HC 1	-15.89 ± 0.29	7,190 ± 30	40.84 ± 0.15
IAAA-183030	2トレンチ9層-2	自然堆積土 第9層	土壌	HC 1	-15.55 ± 0.35	7,180 ± 30	40.90 ± 0.16
IAAA-183031	2トレンチ17層-1	丘陵堆積土 第17層	炭化物	AaA	-24.76 ± 0.38	8,340 ± 30	35.39 ± 0.14
IAAA-183032	2トレンチ17層-2	丘陵堆積土 第17層	土壌	HC 1	-17.63 ± 0.43	6,840 ± 30	42.70 ± 0.15
IAAA-183033	2トレンチ17層-3	丘陵堆積土 第17層	土壌	HC 1	-17.62 ± 0.32	6,960 ± 30	42.03 ± 0.15
IAAA-183034	2トレンチ18層-1	自然堆積土 第18層	土壌	HC 1	-16.98 ± 0.41	7,980 ± 30	37.04 ± 0.14
IAAA-183035	2トレンチ18層-2	自然堆積土 第18層	土壌	HC 1	-16.56 ± 0.34	8,090 ± 30	36.53 ± 0.14

表2 放射性炭素年代測定結果( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

[参考値]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-183027	5,810 $\pm$ 30	48.52 $\pm$ 0.17	5,922 $\pm$ 28	4836calBC-4768calBC (59.0%) 4754calBC-4744calBC (7.2%) 4733calBC-4730calBC (2.0%)	4876calBC-4871calBC (0.7%) 4848calBC-4720calBC (94.7%)
IAAA-183028	5,830 $\pm$ 30	48.38 $\pm$ 0.16	5,948 $\pm$ 27	4880calBC-4871calBC (4.8%) 4848calBC-4786calBC (63.4%)	4906calBC-4729calBC (95.4%)
IAAA-183029	7,040 $\pm$ 30	41.61 $\pm$ 0.15	7,193 $\pm$ 30	6068calBC-6022calBC (68.2%)	6156calBC-6146calBC (0.8%) 6105calBC-5998calBC (94.6%)
IAAA-183030	7,030 $\pm$ 30	41.70 $\pm$ 0.16	7,181 $\pm$ 31	6062calBC-6018calBC (68.2%)	6090calBC-5995calBC (95.4%)
IAAA-183031	8,340 $\pm$ 30	35.40 $\pm$ 0.13	8,344 $\pm$ 30	7483calBC-7447calBC (27.6%) 7431calBC-7426calBC (2.9%) 7412calBC-7361calBC (37.8%)	7509calBC-7341calBC (95.4%)
IAAA-183032	6,710 $\pm$ 30	43.35 $\pm$ 0.15	6,835 $\pm$ 28	5738calBC-5703calBC (52.9%) 5691calBC-5675calBC (15.3%)	5768calBC-5660calBC (95.4%)
IAAA-183033	6,840 $\pm$ 30	42.67 $\pm$ 0.15	6,962 $\pm$ 28	5888calBC-5803calBC (68.2%)	5967calBC-5956calBC (2.1%) 5906calBC-5751calBC (93.3%)
IAAA-183034	7,850 $\pm$ 30	37.65 $\pm$ 0.14	7,979 $\pm$ 30	7032calBC-6982calBC (19.5%) 6975calBC-6910calBC (26.3%) 6886calBC-6829calBC (22.4%)	7047calBC-6770calBC (95.4%)
IAAA-183035	7,950 $\pm$ 30	37.16 $\pm$ 0.14	8,090 $\pm$ 30	7083calBC-7046calBC (68.2%)	7172calBC-7153calBC (2.3%) 7145calBC-7036calBC (93.1%)

表3 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值、暦年較正用  $^{14}\text{C}$  年代、較正年代)

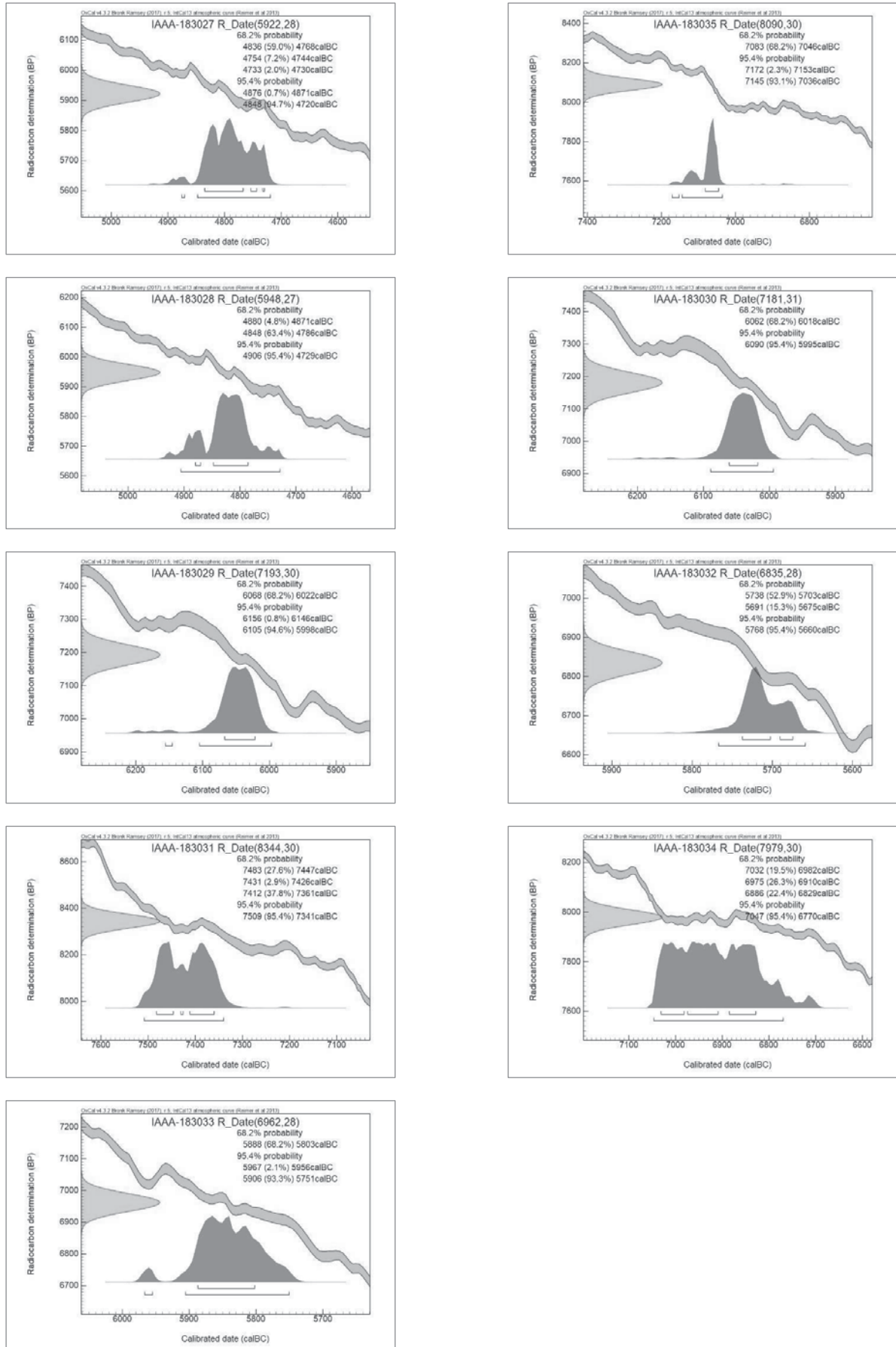


図8 暦年較正年代グラフ(参考)

## 6 総括

本年度は、平成30年度に引き続いて、平泉野台地丘陵部から張り出した場所である駒形45-4地点を調査した。遺構の有無、特に「骨寺（堂）跡」の痕跡を確認する目的で調査を実施した。

しかし、設定したトレンチから遺構は確認できなかった。遺物は、縄文土器の細片、近世・近代の陶磁器片等出土したが、遺構に伴うものではない。また、昨年度調査した2トレンチから採取した土壌サンプル8点と炭化物1点について、放射性炭素年代測定を実施したが、いずれも縄文時代早期から前期の年代を示す結果となった。今年度の調査結果から『陸奥国骨寺村絵図』に関わる痕跡を確認することはできなかったといえる。

(菅原)

### 【参考文献】

- 一関市教育委員会2015『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』。
- 一関市教育委員会2018『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第24集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』。
- 一関市教育委員会2019『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』。
- 伊藤信1957「辺境在家の成立—中尊寺領陸奥国骨寺村について—」『歴史』第15号 東北史学会。
- 入間田宣夫2016「骨寺村の成立は、いつまで遡るのか—骨寺村絵図研究の過去・現在・未来（1）—」一関市博物館研究報告第19号。
- 大石直正1984「中尊寺領骨寺村の成立」『東北文化研究所紀要』第15号。
- 黒田日出男1995「陸奥国中尊寺領骨寺村との対話—描かれた東国の村と境相論—」『描かれた荘園の世界』新人物往来社。
- 島田直明2012「Ⅲ．骨寺村荘園遺跡の植生・植物相—特に丘陵地の植生」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班。
- 鈴木弘太2017「『陸奥国骨寺村絵図』を復原する—大石直正氏の研究成果をもとに—」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究総括報告書』一関市博物館。
- 関根達人2009「北奥の一・二世紀—堂ヶ平経塚の検討—」『平泉文化研究年報』第9号 岩手県教育委員会。
- 土井宣夫2012「Ⅱ．地形地質」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班。
- 広田純一・菅原麻美2017「骨寺村荘園遺跡における田越し灌漑システムの実態と骨寺村絵図（詳細絵図）に描かれた水田の推定」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究総括報告書』一関市博物館。
- 平塚明・島田直明・吉木岳哉・吉川昌伸2012「Ⅳ．一関巖美町本寺地区岩井川左岸の旧河道における花粉分析」『骨寺村荘園遺跡村落調査研究自然関係調査業務報告書』骨寺村荘園遺跡自然調査研究班。
- 吉田敏弘1989「骨寺村の地域像」葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』下巻 地人書房。
- 吉田敏弘2008『絵図と景観が語る 骨寺村の歴史～中世の風景が残る村とその魅力～』本の森。

No.	写真図版	地点	層位	種類	器種	部位	年代	備考
1	6-1-1	4トレンチ	I層	陶器	埴	体～底	17C後半～ 18C前半	肥前産 内面：緑色釉、蛇目釉剥 外面：無釉
2	6-1-2	4トレンチ	I層	磁器	碗	口縁	18～19C	肥前産
3	6-1-3	4トレンチ	I層	陶器	埴	体	18～19C	大塚相馬産
4	6-1-4	4トレンチ	I層	陶器	埴	体～底	18～19C	大塚相馬産
5	6-1-5	4トレンチ	I層	陶器	鉢か	体	19～20Cか	在地産か
6	6-1-6	4トレンチ	I層	磁器	小坏	口縁	近代か	—
7	6-1-7	4トレンチ	I層	磁器	小坏か	体	近代か	—
8	6-2-8	4トレンチ	IV層上面	縄文土器	深鉢	胴	早期～ 前期か	内面：条痕文 外面：地文
9	6-2-9	4トレンチ	IV層上面	縄文土器	深鉢	胴	早期～ 前期か	内面：条痕文 外面：地文
10	6-2-10	4トレンチ	IV層上面	縄文土器	深鉢	胴	不明	外面：地文
11	6-2-11	4トレンチ	I層	石器	剥片	—	—	頁岩 2次加工あり
12	6-2-12	4トレンチ	I層	石器	剥片	—	—	頁岩 2次加工あり
13	6-3-13	5トレンチ	I層	陶器	大甕	体	19～20Cか	在地産か
14	6-3-14	5トレンチ	I層	陶器	埴	体～底	17C後半～ 18C前半	肥前産 呉器手
15	6-3-15	5トレンチ	I層	磁器	碗	体	不明	肥前産か
16	6-3-16	5トレンチ	I層	陶器	埴	口縁	18～19C	大塚相馬産
17	6-3-17	5トレンチ	I層	陶器	埴	体	18～19C	大塚相馬産
18	6-3-18	5トレンチ	I層	陶器	埴	体	18～19C	大塚相馬産
19	6-3-19	5トレンチ	I層	陶器	埴	体～底	18～19C	大塚相馬産
20	6-3-20	5トレンチ	I層	陶器	不明	体	19～20Cか	在地産か
21	6-3-21	5トレンチ	I層	磁器	碗	口縁	近代か	—
22	6-3-22	5トレンチ	I層	磁器	碗	体	近代か	銅版転写刷
23	6-3-23	5トレンチ	I層	磁器	碗	底	近代か	—
24	6-4-24	5トレンチ	排土	陶器	香炉か	体	19C	内面：無釉 2次被熱
25	6-4-25	5トレンチ	排土	須恵器	甕	体	古代	内面：平行叩き目 外面：同心円叩き目
26	6-4-26	5トレンチ	排土	須恵器	甕	頸～体	古代	内外面：ロクロナデ
27	6-4-27	5トレンチ	排土	須恵器	甕	体	古代	内面：平行叩き目 外面：同心円叩き目
28	6-5-28	5トレンチ	I層	鉄製品	釘	—	不明	—
29	6-5-29	5トレンチ	I層	石器	石鏃	—	—	頁岩 完形
30	6-5-30	5トレンチ	I層	石器	石匙か	—	—	頁岩
31	6-5-31	5トレンチ	I層	石器	剥片	—	—	頁岩
32	6-5-32	5トレンチ	I層	石器	剥片	—	—	頁岩
33	6-5-33	5トレンチ	排土	石器	剥片	—	—	頁岩
34	6-6-34	6トレンチ	I層	磁器	碗	底	不明	—
35	6-6-35	6トレンチ	I層	陶器	埴	体～底	17C末～ 18C末	肥前産
36	6-6-36	6トレンチ	I層	磁器	碗	体	17C末～ 18C末	肥前産 外面：網目文
37	6-6-37	6トレンチ	I層	陶器	埴	口縁	18～19C	大塚相馬産
38	6-6-38	6トレンチ	I層	陶器	埴	体	18～19C	大塚相馬産
39	6-6-39	6トレンチ	I層	陶器	甕	把手	19～20Cか	在地産か
40	6-6-40	6トレンチ	I層	磁器	皿	口縁～底	19～20Cか	—
41	6-6-41	6トレンチ	排土	磁器	碗	口縁	18～19C	肥前産
42	6-8-42	6トレンチ	I層	縄文土器か	不明	体	—	—
43	6-7-43	6トレンチ	I層	石製品	砥石	—	—	泥岩 砥面は2面 仕上げ砥か
44	6-8-44	6トレンチ	I層	石器	剥片	—	—	赤色頁岩
45	6-8-45	6トレンチ	I層	石器	剥片	—	—	玉髓
46	6-8-46	6トレンチ	I層	石器	剥片	—	—	玉髓
47	6-8-47	6トレンチ	I層	石器	剥片	—	—	頁岩

表4 出土遺物観察表



1 4 トレンチ完掘（南東から）



2 5 トレンチ完掘（北西から）



1 6トレンチ完掘（南東から）



2 7トレンチA完掘（北東から）



1 7トレンチB完掘（北東から）



2 7トレンチBと2トレンチ（昨年度調査）の層序対応関係（北東から）





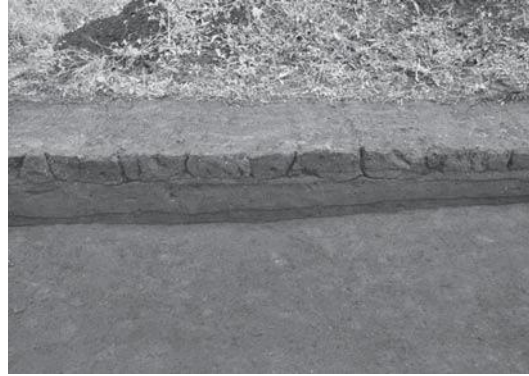
1 4トレンチ北西端土層平面（北西から）



2 6トレンチ西壁土層断面（北東から）



1 4トレンチ調査前（南東から）



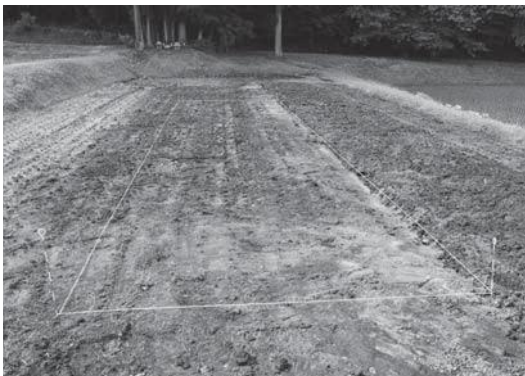
2 4トレンチ西壁土層断面（北東から）



3 5トレンチ調査前（南東から）



4 5トレンチ西壁土層断面（北東から）



5 6トレンチ調査前（南東から）



6 7トレンチA北壁土層断面（南東から）

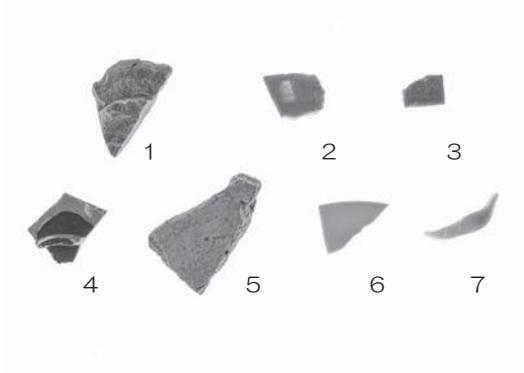


7 7トレンチAと2トレンチの  
層序対応関係（北東から）

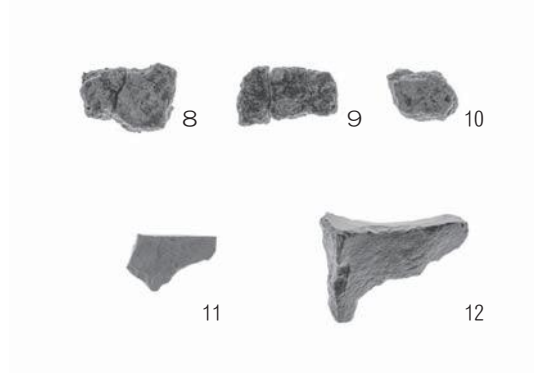


8 7トレンチB土層断面（南東から）

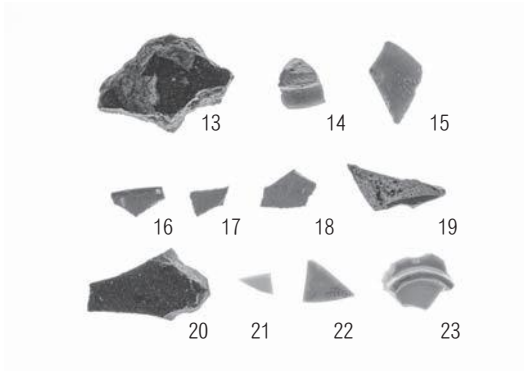
写真図版 6



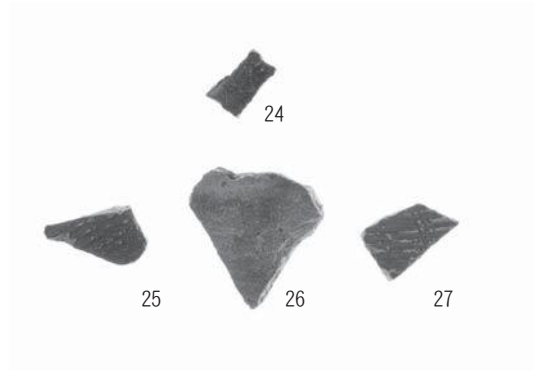
1 4トレンチ出土遺物(1) 陶磁器



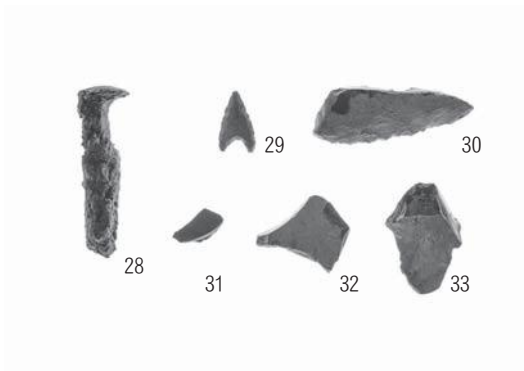
2 4トレンチ出土遺物(2) 縄文土器・石器



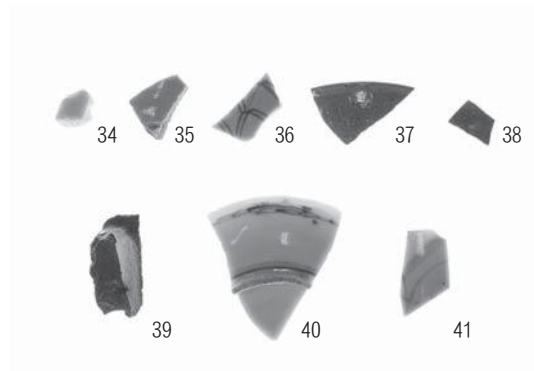
3 5トレンチ出土遺物(1) 陶磁器



4 5トレンチ出土遺物(2) 陶器・須恵器



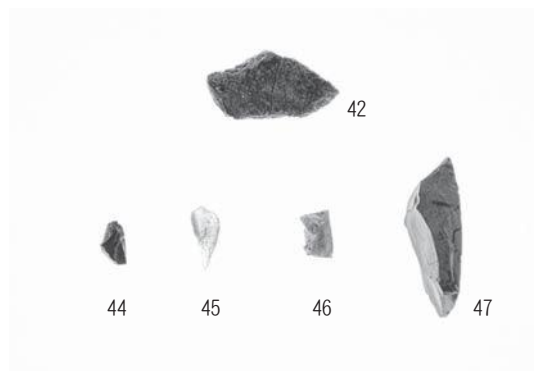
5 5トレンチ出土遺物(3) 鉄製品・石器



6 6トレンチ出土遺物(1) 陶磁器



7 6トレンチ出土遺物(2) 石製品



8 6トレンチ出土遺物(3) 縄文土器か・剥片

# 抄 録

ふりがな	ほねでらむらしょうえんいせきかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	骨寺村荘園遺跡確認調査報告書							
副書名	駒形45-4地点							
巻次								
シリーズ名	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第29集							
編著者名	菅原孝明・光井文行・山川純一							
編集機関	一関市教育委員会							
所在地	〒021-8503 一関市竹山町7-5 TEL 0191-26-0820							
発行年月日	2020年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほねでらむらしょうえん 骨寺村荘園	いちのせきしげん びちようあざ 一関市巖美町字 こまがた 駒形45-4	03209	NE72- 2283	38° 58' 35"	140° 56' 55"	20190603 ～ 20190704 20190930 ～ 20191017	146m <sup>2</sup>	確認調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
骨寺村荘園	荘園	縄文、中世、 近世		縄文土器、石器、 須恵器、陶磁器				
要 約	本年度は、昨年度に引き続き駒形45-4地点を調査したが、遺構は確認できなかった。遺物は表土及び排土中から近世・近代の陶磁器片等が、4トレンチのIV a層上面から縄文土器の細片が出土したが、遺構に伴うものではない。							

岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第29集

## 骨寺村荘園遺跡確認調査報告書

駒形45-4地点

発行年月日 令和2年3月23日

発行・編集 一関市教育委員会

〒021-8503

岩手県一関市竹山町7-5

電話 (0191) 26-0820

印刷 川嶋印刷株式会社

〒029-4194

岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21

電話 (0191) 46-4161(代)